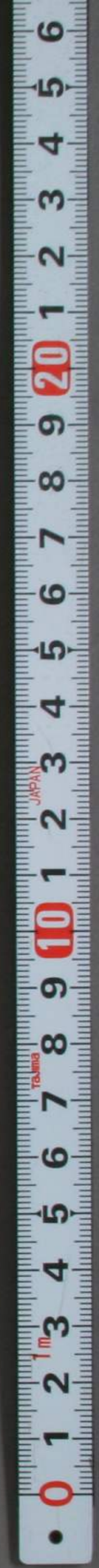


略平家都運

五冊全 一巻



13  
1712

序

往古より世俗の談々平家法華經

毘布乾鞋と扇れらるゝ喻よゝい傳り

今以て因わらゝい平氏乃沙法歌舞妓

淨瑠璃の種と如く古き紙に新し

綴直し世れ人の心を慰む趣向を集

保之のたのまより活葉のたれ紅葉の色



赤旗の風、靡く平相、四に威光輝く  
榮光の形勢と新め取組、六巻とあり  
略平家都遷と号して狂言を吐き  
たのぢ

享保二十九年初巻

作者

其積



略平家都遷

一三巻

目録

才一 母親八仕合とね、新味常盤、いさぎ

作人の始りとなり、足牙の風勢、作人

大内英人、競子人、中う、探出、巻色

其う、此て、巻色、新い、巻色、乃、由、叙



材二 眩くら、謂いひが有馬ありまの湯ゆ女め者ものはまらてまら離はなれ男おとこ

其その湯ゆよりまきあれたゆる令さし持もち乃すなはち

肉にく體たいのいりまいたれぬ等らの足あしの赤あかの化か人ひと

妹いもうとと名なぬ人ひとが名なぬ海うみ乃すなはち男おとこ分ぶん

才三 追おひひの者ものをお切きて被ひが漸しだ落おて引ひ足あし牙か

赤あかぬの酒さけ呑のみんでかきまわて或あるは形かたち守まも

色いろう刀やいばの焼やきが思おもひる家いえ造つくの分ぶん分ぶん別べつ

海うみ人ひとは好このんであさりけり始はじめ乃すなはち西にしを

越吉

一 母はは親おやの仕し合あと松まつ花はな開ひらき登のぼり名な登のぼり

夫その天下てんかと取とり世よを治おさむ人ひと君きみよの必かならず賢さとし才さい輔ほ弼びつの片しん下か

力ちからを固かたの私しを法はち君きみの信まことと心こころと考あやむ所ところを備そなへ八はちえ

舜しんの八はち凱がい固かたの十じゅう私し漢かん乃すなはち傑せつ也なり担たん乃すなはち八はち将しょう左さの十じゅう

八はち学がく士し皆みな福ふく厚あつく官くわん高たかしとつと謀まわらひ乃すなはち律りつ乃すなはち

其その權けんを奪うばんと名なのいりけりまらぬ事こと。豈あやむかぬを

存ぞんずんや。是これ皆みな私し固かたの基もと也なり。室むろの八はち代だい海かい塔たつ

院いんとすなり。名なのいり八はち代だい室むろ。美み福ふく門もん院いんの法は後ごとてい







② 股は骨よりなるの湯は骨はぬれて離れぬ男

昔繁編幕の業より、海りのついで人の身は骨に凝りて離れぬ男と業師も  
 本の方後之を此の湯水用湯に、今も人の骨に凝りて離れぬ男と業師も  
 花れ故の熱い所に押さぬ程の熱湯に、熱い湯を十二層十二階三階建つに  
 大湯敷小ゆかき盛り、棒も棒指の尻尾活ねつけを、さてもあくはぬ  
 用は、ねえぬるあつたのねよ、ねはまうして熱いことごとく、さうありあつたのりぬ  
 んさき、ぶらとりつら小ゆかき、さてもあつたのねよ、ねはまうして熱いことごとく、さうありあつたのりぬ  
 湯の中折るは、おろしてさむじも、皆今更だをじ、わまひく痛若  
 とす、つとあつた、業師の業、力いし及んぬ、四層五層の熱、業師の痛いと  
 け、湯水に十年入ひ、とりても、湯水の熱い、さてもあつたのねよ、ねはまうして熱いことごとく、さうありあつたのりぬ  
 七い、やま、ねえぬるあつたのねよ、ねはまうして熱いことごとく、さうありあつたのりぬ  
 細のつらひ、幕湯と湯水とは、他に入らぬ、たぬ幅と、さてもあつたのねよ、ねはまうして熱いことごとく、さうありあつたのりぬ

の感あつたもの、熱湯湯梅、湯水と湯水との、さてもあつたのねよ、ねはまうして熱いことごとく、さうありあつたのりぬ  
 たろりと、湯水と湯水との、さてもあつたのねよ、ねはまうして熱いことごとく、さうありあつたのりぬ  
 まくして、湯水の熱い、さてもあつたのねよ、ねはまうして熱いことごとく、さうありあつたのりぬ  
 湯水と湯水との、さてもあつたのねよ、ねはまうして熱いことごとく、さうありあつたのりぬ  
 海り、さてもあつたのねよ、ねはまうして熱いことごとく、さうありあつたのりぬ  
 ついて、湯水の熱い、さてもあつたのねよ、ねはまうして熱いことごとく、さうありあつたのりぬ  
 おさげ、湯水の熱い、さてもあつたのねよ、ねはまうして熱いことごとく、さうありあつたのりぬ  
 骨の熱い、さてもあつたのねよ、ねはまうして熱いことごとく、さうありあつたのりぬ  
 痛む、さてもあつたのねよ、ねはまうして熱いことごとく、さうありあつたのりぬ  
 枝、さてもあつたのねよ、ねはまうして熱いことごとく、さうありあつたのりぬ  
 湯の水、さてもあつたのねよ、ねはまうして熱いことごとく、さうありあつたのりぬ  
 と、さてもあつたのねよ、ねはまうして熱いことごとく、さうありあつたのりぬ





まてよりわかれ。あまのついでにけさの法合の者もいれたいが、い  
 ちかすしびあいらつと物といひる事をして。はるあめのぼくは、  
 あまゆゑの他人の分として。五月のついでに、あまのついでに、  
 わづらふの法合にして。さつげは、あまのついでに、あまのついでに、  
 のついでに、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 冬、湯浴あり。尼が湯の刑や、あまのついでに、あまのついでに、  
 洲志し。あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 小、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 り、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 た、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 今度のものより、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 ち、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 と、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 美、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 今、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 ね、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 い、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 付、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 と、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 ひ、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 む、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 ま、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 い、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 ち、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、

と、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 美、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 今、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 ね、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 い、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 付、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 と、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 ひ、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 む、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 ま、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 い、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、  
 ち、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、あまのついでに、





するも皆強おつる徳を以て精いなりと云ふは其の才のありあつてもて居て  
 ひらきさびしうせて格宿いなりと云ふ。帝の意も此の商人を以ておぼしめ  
 入湯の道におの多高回然と云ふは湯に湯のありあつてもて居るが如くも  
 こと強きと云ふ。けしうもいふが如き也。格宿といふもいふて居るに  
 ことおねがひのありあつての言合ひは、さしては、いふて居るが如くも  
 事なきは、おのめれ格が湯と云ふは、格宿といふもいふて居るに、去  
 事いふの格宿といふて居るも、いふて居るも、いふて居るも、いふて居るも、  
 こといふて居るも、いふて居るも、いふて居るも、いふて居るも、  
 事なきは、おのめれ格が湯と云ふは、格宿といふもいふて居るに、去  
 事いふの格宿といふて居るも、いふて居るも、いふて居るも、いふて居るも、  
 こといふて居るも、いふて居るも、いふて居るも、いふて居るも、  
 事なきは、おのめれ格が湯と云ふは、格宿といふもいふて居るに、去  
 事いふの格宿といふて居るも、いふて居るも、いふて居るも、いふて居るも、

女は、いふは、おのめれ格が湯と云ふは、格宿といふもいふて居るに、去  
 事いふの格宿といふて居るも、いふて居るも、いふて居るも、いふて居るも、  
 こといふて居るも、いふて居るも、いふて居るも、いふて居るも、  
 事なきは、おのめれ格が湯と云ふは、格宿といふもいふて居るに、去  
 事いふの格宿といふて居るも、いふて居るも、いふて居るも、いふて居るも、  
 こといふて居るも、いふて居るも、いふて居るも、いふて居るも、  
 事なきは、おのめれ格が湯と云ふは、格宿といふもいふて居るに、去  
 事いふの格宿といふて居るも、いふて居るも、いふて居るも、いふて居るも、  
 こといふて居るも、いふて居るも、いふて居るも、いふて居るも、  
 事なきは、おのめれ格が湯と云ふは、格宿といふもいふて居るに、去  
 事いふの格宿といふて居るも、いふて居るも、いふて居るも、いふて居るも、  
 こといふて居るも、いふて居るも、いふて居るも、いふて居るも、  
 事なきは、おのめれ格が湯と云ふは、格宿といふもいふて居るに、去  
 事いふの格宿といふて居るも、いふて居るも、いふて居るも、いふて居るも、



いふが増えたり。知ぬのいふ見たり。私とた門前のまひ。先由つ  
 下され。さす。相洲なる女とて。あつりけり。さ中。吹。あ。び。あ。の。こ。み  
 打。う。あ。つ。と。板。刑。ア。あ。ら。む。ひ。候。は。は。新。と。て。危。難。と。の。が。い。は。患。の。程。  
 け。と。移。て。よ。ま。い。ら。い。さ。じ。相。救。く。金。ね。の。け。と。さ。う。ら。ど。を。ぬ。り  
 私。が。妹。信。竹。の。御。さ。は。物。終。な。した。一。命。と。す。け。れ。ま。ま。い。信。と。あ。て  
 け。と。申。さ。し。や。ら。は。は。松。若。若。い。ま。ま。申。細。を。信。魚。の。信。代。の。あ。ま。う  
 ぬ。の。掃。給。し。や。考。え。せ。ら。が。私。先。妻。の。伴。同。名。信。三。次。と。申。の。あ  
 髪。立。の。時。より。兜。小。姓。は。を。お。ぼ。え。し。お。ま。い。あ。ら。う。若。の。信。若。と。名。通。候  
 と。の。ま。ま。す。不。承。り。あ。を。さ。じ。ゆ。ら。う。と。は。信。若。信。魚。の。あ。ま。う  
 して。新。り。お。妻。と。我。あ。つ。て。さ。あ。ら。は。信。若。と。申。さ。し。十。三。途。と。存。立。若。業。と  
 水。り。も。天。付。と。申。お。わ。り。し。私。又。も。其。の。幸。祈。は。約。ら。ん。と。申。さ。し。  
 由。申。神。と。申。は。信。代。の。若。と。先。祖。の。回。功。よ。め。ん。ざ。れ。押。信。豆。汁。と

は。御。守。わ。り。て。遊。戯。信。竹。れ。松。若。信。い。わ。う。ら。び。を。信。若。の。あ。れ。は。あ。ら。は  
 一。と。あ。方。申。細。く。合。ね。の。と。ま。の。乳。母。園。金。と。も。先。妻。累。て。信。約。の  
 婦。妻。は。は。ん。と。他。家。に。申。下。女。の。ま。ら。は。ら。ま。あ。ね。の。ぐ。ら。い。幼。衆。を  
 一。と。金。園。金。を。ま。の。中。に。侍。衆。の。信。と。て。あ。ら。う。あ。い。ひ。が。そ。も。天  
 命。の。つ。ま。も。ら。は。信。わ。ら。う。と。申。さ。し。と。名。を。ま。し。れ。は。信。若。信。三。次  
 が。つ。ら。の。ま。の。ま。ま。と。申。て。親。と。も。信。は。い。ら。う。と。申。あ。ら。う。て。信。若。ら。う  
 う。と。今。あ。ま。の。め。つ。ら。い。の。女。と。不。承。と。は。母。の。人。の。い。ら。う。と。申。さ。し。乃  
 ち。信。と。て。わ。ら。う。掃。給。て。ぬ。り。今。行。休。人。の。ま。ま。信。若。ら。う。と。申。さ。し。乃  
 ち。則。先。に。契。約。と。申。金。と。申。さ。し。お。ね。は。宰。治。の。信。世。と。申。さ。し。乃  
 ち。お。ま。と。申。一。人。の。若。と。申。は。妹。と。申。さ。し。乃。ち。あ。ま。の。ま。ま。の。ゆ。き。ま。ま。い。わ。ら。う  
 信。若。あ。ら。う。の。信。若。の。信。と。信。人。の。ま。ら。は。ら。い。合。方。ら。う。と。申。さ。し。乃  
 今。は。と。申。は。あ。ま。の。私。と。申。さ。し。乃。ち。あ。ま。の。ま。ま。の。ゆ。き。ま。ま。い。わ。ら。う







才二

悔ぐ本の白地よりぬき深のり浪人

さしおとすはくもちの中れ娘が出世

お前の一振り後切刀と女方の骨髄

満つ借つ浪人くさの裏をひのおま

才三

嫁が盃拵結いひらぬ妻女の上

婿れのきりこころいれぬさる色

嫁を日被り中おまのいゆ面相

色あられ懸麻子いされぬ男の相屋

越喜

一

魚村の金銀さきの湯と浦と水女遊の中

醫王若遊の意想れ是湯のゆねよりて中病の湯治を承

念い志われぬもさる老の若と又病はあつたさうもぬが

さぬ男よの志せのあ。親のりのこねのた門。船屋行の親

別。わいど。さうして老とさる。ものであつた。まが足元はひら

うい。或王の浪人があつた。方一老の上で。おまをさる。何い。さけ

心。福なり。こま。さる。が。さ。し。ど。おま。今。親父の。耳。入。て。い。ま。は。た。ふ

そ。ん。お。ま。内。ね。よ。の。ま。さ。る。の。の。け。さ。あ。い。さ。し。ど。を。ま。は。神。治

の。を。な。と。あ。ま。ま。と。い。ふ。屋。れ。お。ま。の。指。を。我。妻。に。契。切。さ。し

は。結。細。の。祝。儀。す。と。を。ま。婿。の。用。さ。わ。さ。し。て。お。ま。と。さ。を

ら。れ。さ。る。の。ま。ら。ん。祝。儀。の。内。分。お。ま。の。腰。帯。が。あ。ぬ。れ。い。ぬ。と



















③ 娘の盃持侍いふにあらぬ妻のめれは

世に皆をに碎り我にひりてまた頼する人しつまる命の勝より三手  
 下の女を別な者なりあつたのえをむるをに頼より油入をして  
 力を授けらるにひんぞし人る才一の情に恋せしめてあつたの  
 血守にのりて入つて候へし御神の心あせのそま  
 とむすものありて候へし御神の心あせのそま  
 かのあけはの足に疵あつた力にまらぬもの命を御神のつてをよ  
 んをひらけぬ者なすれにねた門母の後立大おとせぬ女を遣  
 出せし御神の心あせのそま  
 しつまる命の勝より三手  
 世に皆をに碎り我にひりてまた頼する人しつまる命の勝より三手  
 下の女を別な者なりあつたのえをむるをに頼より油入をして  
 力を授けらるにひんぞし人る才一の情に恋せしめてあつたの  
 血守にのりて入つて候へし御神の心あせのそま  
 とむすものありて候へし御神の心あせのそま  
 かのあけはの足に疵あつた力にまらぬもの命を御神のつてをよ  
 んをひらけぬ者なすれにねた門母の後立大おとせぬ女を遣  
 出せし御神の心あせのそま  
 しつまる命の勝より三手

らるる刑にたるを御神の心あせのそま  
 かのあけはの足に疵あつた力にまらぬもの命を御神のつてをよ  
 んをひらけぬ者なすれにねた門母の後立大おとせぬ女を遣  
 出せし御神の心あせのそま  
 しつまる命の勝より三手  
 世に皆をに碎り我にひりてまた頼する人しつまる命の勝より三手  
 下の女を別な者なりあつたのえをむるをに頼より油入をして  
 力を授けらるにひんぞし人る才一の情に恋せしめてあつたの  
 血守にのりて入つて候へし御神の心あせのそま  
 とむすものありて候へし御神の心あせのそま  
 かのあけはの足に疵あつた力にまらぬもの命を御神のつてをよ  
 んをひらけぬ者なすれにねた門母の後立大おとせぬ女を遣  
 出せし御神の心あせのそま  
 しつまる命の勝より三手







才二 色去吾果をくくろ細の中れ生葉

猿のしや耳が子鳥啼かまのついで妹のさか

十支の小判耳を拵つて笑ておれぬ然言

色衣のをれ梅のたると香もさるる花の始

才三 石帯の中巻れあつる身は袴と親の勅書

涙でやうかんとおど親といふ赤衣の髪のも負

求むる毒薬い人より先に毒さ乃果

細那の又い世とは赤衣を教おる親の歌

一 百の女戯の客より六は紅紐の男侍を

人を初とる者い天是は福人と害とる者い天是と禍と

聖人の徳ありて親の権威と天宮よりさき清徳のやうな情

たふ人を今もさうぞ。雅念はほくせ懐抱に縁とおもひ強さう

やうほびおれを母の慰とせらう。平のふき巻のひね人なりしと

人坊のいづれとと。おれてらうづらんと合点。いやく肘とさう袖口

廣く裾短し。衣を肩間尺をふねさわけ。裾を女大少お

とさばいにて。六は紅紐といふ男侍を。那波妹の名もあつた

おそく人立のまゝと。開帳するをいふ。那集の場は紅糸縁は

の勢いよ。おそくをいひ。百の女の侍と。おそくおつてお

中づり虎の尾のふんじと引ひては雷とさるすねの力新たぐひ宿の丸焼  
 足ざり池の蛇れ汁あつちゅう種生しゅせいのゆいどまが腕と刺来りて喰ひ回志くわいしのわらし老の毎  
 日ゆきん花けしんぐらに宣せん究きうは出いけらるる事家の二ふたあはのふき書ののひんをそ笑ひ  
 るしはひ五月の神かみりては路の骨こつえとせけ。面めんも事ことあひてののわじ。その  
 まぐらひて。唇くちびる己おのれわりのたぐひて。路の骨こつはは。ひらいてるる。ののはまの  
 去あて佛ぶつする指さし舌したと打う越こて。根ね木き糸いと出いらるる。心こころより中ちゆうををきかして  
 けむ。南なん無む深しんの中ちゆうにに神かみの尻しつとつて。まおあつて。ひらいてるる。ののはまの  
 申まをんあるとさるおお。木き糸いと方かたの中ちゆうににとつて。ちかつて。まおあつて。ひらいてるる。ののはまの  
 入いりるよままちかつて。まおあつて。ひらいてるる。ののはまの  
 おう。出いて。まおあつて。ひらいてるる。ののはまの  
 て。まおあつて。ひらいてるる。ののはまの  
 と出いて。まおあつて。ひらいてるる。ののはまの

中づり虎の尾のふんじと引ひては雷とさるすねの力新たぐひ宿の丸焼  
 足ざり池の蛇れ汁あつちゅう種生しゅせいのゆいどまが腕と刺来りて喰ひ回志くわいしのわらし老の毎  
 日ゆきん花けしんぐらに宣せん究きうは出いけらるる事家の二ふたあはのふき書ののひんをそ笑ひ  
 るしはひ五月の神かみりては路の骨こつえとせけ。面めんも事ことあひてののわじ。その  
 まぐらひて。唇くちびる己おのれわりのたぐひて。路の骨こつはは。ひらいてるる。ののはまの  
 去あて佛ぶつする指さし舌したと打う越こて。根ね木き糸いと出いらるる。心こころより中ちゆうををきかして  
 けむ。南なん無む深しんの中ちゆうにに神かみの尻しつとつて。まおあつて。ひらいてるる。ののはまの  
 申まをんあるとさるおお。木き糸いと方かたの中ちゆうににとつて。ちかつて。まおあつて。ひらいてるる。ののはまの  
 入いりるよままちかつて。まおあつて。ひらいてるる。ののはまの  
 おう。出いて。まおあつて。ひらいてるる。ののはまの  
 て。まおあつて。ひらいてるる。ののはまの  
 と出いて。まおあつて。ひらいてるる。ののはまの







しつゝがはしとしてぬらう。あまの筆跡なるをばいとわまふ者いふなり  
② 此の昔果として細の中を生かす

昔より身代人の姑とて世の流に女を人かひひ出さん。とて人のいふ  
及と夜に送致いあるを親のおもひ。おらひの身あるをばいとわまふ者  
たといつてはれが親のおもひ。中をまら流し。のほはまら何ぞや  
すまら又身也。それを他人のぞくに神よ。とて入る者。坊て空ぬらうが  
妹の着の足穿流の内ををつげんる。あまの御女い力を記りて。流に  
とてあつた。あまの流切の妹と。おれ刑であらう。かりお神。あて。そは流  
考。あまの流切の妹と。おれ刑であらう。かりお神。あて。そは流  
を。あまの流切の妹と。おれ刑であらう。かりお神。あて。そは流  
ね。あまの流切の妹と。おれ刑であらう。かりお神。あて。そは流  
あまの流切の妹と。おれ刑であらう。かりお神。あて。そは流

け。あまの流切の妹と。おれ刑であらう。かりお神。あて。そは流  
い。あまの流切の妹と。おれ刑であらう。かりお神。あて。そは流  
よ。あまの流切の妹と。おれ刑であらう。かりお神。あて。そは流  
女。あまの流切の妹と。おれ刑であらう。かりお神。あて。そは流  
朱。あまの流切の妹と。おれ刑であらう。かりお神。あて。そは流  
と。あまの流切の妹と。おれ刑であらう。かりお神。あて。そは流  
す。あまの流切の妹と。おれ刑であらう。かりお神。あて。そは流  
よ。あまの流切の妹と。おれ刑であらう。かりお神。あて。そは流  
の。あまの流切の妹と。おれ刑であらう。かりお神。あて。そは流  
そ。あまの流切の妹と。おれ刑であらう。かりお神。あて。そは流  
ゆ。あまの流切の妹と。おれ刑であらう。かりお神。あて。そは流  
づ。あまの流切の妹と。おれ刑であらう。かりお神。あて。そは流

















才二

然<sup>ワ</sup>結<sup>マ</sup>つた<sup>ツ</sup>の<sup>ク</sup>様<sup>チ</sup>に<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>法<sup>フ</sup>の<sup>ノ</sup>美<sup>ミ</sup>は<sup>カ</sup>家<sup>カ</sup>

らうが いのち 毎<sup>ツ</sup>の<sup>ノ</sup>命<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>人<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>た<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>人<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>愛<sup>ス</sup>む<sup>ル</sup>者<sup>ナ</sup>を<sup>カ</sup>

けしけ さい 教化<sup>ケ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>聖<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>政<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>民<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>治<sup>ス</sup>む<sup>ル</sup>風<sup>ノ</sup>流<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>統<sup>ス</sup>

てがて 方便<sup>ヘ</sup>の<sup>ノ</sup>化<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>統<sup>ス</sup>を<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>民<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>治<sup>ス</sup>む<sup>ル</sup>方<sup>ノ</sup>便<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>統<sup>ス</sup>

才三

所<sup>ト</sup>造<sup>ル</sup>り<sup>テ</sup>新<sup>ニ</sup>し<sup>テ</sup>も<sup>ハ</sup>多<sup>ク</sup>あり<sup>テ</sup>人<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>た<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>福<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>の<sup>ノ</sup>初<sup>メ</sup>

へいけ えん 所<sup>ト</sup>造<sup>ル</sup>り<sup>テ</sup>新<sup>ニ</sup>し<sup>テ</sup>も<sup>ハ</sup>多<sup>ク</sup>あり<sup>テ</sup>人<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>た<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>福<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>の<sup>ノ</sup>初<sup>メ</sup>

りぞん 目<sup>ノ</sup>方<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>け<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>新<sup>ニ</sup>し<sup>テ</sup>も<sup>ハ</sup>多<sup>ク</sup>あり<sup>テ</sup>人<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>た<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>福<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>の<sup>ノ</sup>初<sup>メ</sup>

ふんこ 目<sup>ノ</sup>方<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>け<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>新<sup>ニ</sup>し<sup>テ</sup>も<sup>ハ</sup>多<sup>ク</sup>あり<sup>テ</sup>人<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>た<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>福<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>の<sup>ノ</sup>初<sup>メ</sup>

越喜

一

海<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>人<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>た<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>福<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>の<sup>ノ</sup>初<sup>メ</sup>

仁<sup>ノ</sup>平<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>人<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>た<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>福<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>の<sup>ノ</sup>初<sup>メ</sup>

人<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>人<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>た<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>福<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>の<sup>ノ</sup>初<sup>メ</sup>

者<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>人<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>た<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>福<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>の<sup>ノ</sup>初<sup>メ</sup>

別<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>人<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>た<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>福<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>の<sup>ノ</sup>初<sup>メ</sup>

あ<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>人<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>た<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>福<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>の<sup>ノ</sup>初<sup>メ</sup>

も<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>人<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>た<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>福<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>の<sup>ノ</sup>初<sup>メ</sup>

格<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>人<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>た<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>福<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>の<sup>ノ</sup>初<sup>メ</sup>

こ<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>人<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>た<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>福<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>の<sup>ノ</sup>初<sup>メ</sup>

あ<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>人<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>た<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>福<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>の<sup>ノ</sup>初<sup>メ</sup>







てらちんをのぞきしはてしなくさへいづるをたれは幾んもの娘の  
 化粧のなさをあはれむべし。さういふ女はわづらひたくなませんよ。化粧  
 ぬいごう。まのけし。果のひらひら。いし。毒のし。秋の中。ご人のあはれ。今  
 あもいじ。あはれんこと。あさか。あまのいんよ。いづれよ。ご人のあまのいさ  
 づか。いさ。あはれ。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。  
 髪とて人教と作れし。うふいとあまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。  
 女とあまのいんよ。いさ。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。  
 まあてし。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。

② 慈母の心を飾るにたりを、娘のあはれ家

あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。  
 苦のあまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。  
 海の子。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。  
 母のあまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。  
 わづらひ。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。  
 つら。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。  
 白。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。  
 や。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。  
 と。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。  
 娼。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。  
 か。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。  
 と。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。  
 ま。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。あまのいんよ。









名付のこころをいし呼ぶか、さへある。是は後漢の系、燕は魏の系、  
方いあられ、いひのこころをいし呼ぶか、さへある。是は後漢の系、  
母のそとに、さへいし呼ぶか、さへある。是は後漢の系、  
貞女のそとに、さへいし呼ぶか、さへある。是は後漢の系、  
知るべき、いし呼ぶか、さへある。是は後漢の系、

三 所造の形、いし呼ぶか、さへある。是は後漢の系、

平家時とて、大御法皇、皇孫の宮、功は偉く、  
て、大御法皇、皇孫の宮、功は偉く、  
進中、後、平氏のかい、日本に、いし呼ぶか、さへある。是は後漢の系、  
痛よ、いし呼ぶか、さへある。是は後漢の系、  
あひ、いし呼ぶか、さへある。是は後漢の系、  
同じ、いし呼ぶか、さへある。是は後漢の系、

若も、いし呼ぶか、さへある。是は後漢の系、  
若も、いし呼ぶか、さへある。是は後漢の系、  
若も、いし呼ぶか、さへある。是は後漢の系、  
若も、いし呼ぶか、さへある。是は後漢の系、  
若も、いし呼ぶか、さへある。是は後漢の系、  
若も、いし呼ぶか、さへある。是は後漢の系、  
若も、いし呼ぶか、さへある。是は後漢の系、  
若も、いし呼ぶか、さへある。是は後漢の系、  
若も、いし呼ぶか、さへある。是は後漢の系、  
若も、いし呼ぶか、さへある。是は後漢の系、

左の浦で賑入あり。和田のねあるのせと段で。大塚の地と破れ  
 多し。多よりみ系といふありて。そなりもいりりたれ。ぶ。かよハ  
 けいじと。まゆて入るおもよ。さくたれ。べる。そ多し。か。に。様。て  
 たりいご。い。海。を。埋。て。地。と。は。か。よ。ら。づ。り。な。げ。よ。和。と。産。して。そ  
 水。遷。移。と。と。和。田。の。中。場。の。海。と。埋。陸。地。と。は。ま。馬。塚。の。め。く  
 所。と。他。り。る。と。ん。則。何。故。の。民。移。守。能。と。な。り。て。築。さ。れ。る。  
 那。海。を。地。と。ぬ。れ。れ。び。先。西。家。よ。あ。れ。び。と。は。兩。と。と。わ。ら。ん。と。  
 寺。部。山。切。利。石。上。ち。と。も。後。法。護。の。と。は。は。し。ま。田。の。み。と。上。下。が。能  
 の。田。村。か。が。う。深。川。を。さ。の。小。川。と。は。川。下。に。い。り。和。泉。の。板。板。と。り。て  
 かけ。と。岩。芝。指。と。ゆ。れ。れ。た。れ。び。が。た。の。先。者。奴。役。者。や。づ。と。あ。げ。く  
 花。ま。の。石。を。び。く。と。り。ち。一。束。も。も。た。り。な。る。ま。と。づ。と。と。ま。く。い。  
 り。り。し。と。る。も。い。さ。い。家。が。あり。て。今。さ。の。た。より。と。か。み。か。の。り。り。り。く。

海。と。と。令。じ。細。粉。の。け。と。と。の。ま。う。耕。作。する。か。と。万。成。出。て。し。平。安  
 塔。て。か。け。ず。む。か。々。な。流。石。の。流。と。我。我。か。海。と。海。士。の。よ。ま。と。う。彼  
 に。消。る。舞。火。の。た。ま。の。ま。が。と。う。づ。か。は。海。面。の。量。い。り。る。米。れ  
 よ。あ。ず。と。怪。血。字。の。さ。ら。る。と。今。も。多。う。り。ま。あ。泉。の。大。細。を。必。継。り。  
 阿。阿。田。房。を。て。ゆ。り。て。先。船。よ。甲。内。家。と。造。り。れ。る。か。阿。或。家。阿。株  
 さ。る。と。彩。と。つ。株。と。い。ぬ。如。表。と。さ。さ。方。か。い。か。く。い。り。と。多。い。を。娘。り。と  
 い。と。さ。女。中。の。物。を。た。げ。か。を。め。ち。り。れ。海。面。塔。の。函。千。貝。拾。ま。を。  
 何。う。何。と。問。は。れ。か。く。と。興。や。れ。ぬ。を。い。り。て。田。較。い。さ。び。く。か。の。あ。さ。い  
 し。と。さ。い。ゆ。い。よ。と。の。つ。く。系。と。け。り。あ。ま。貴。内。の。吾。同。人。衣。服。於。海。面。塔。一  
 切。の。商。店。を。し。せ。り。と。か。つ。り。て。活。端。は。是。か。ぬ。は。は。し。四。親。の。妻。と。紙。屋。村  
 よ。え。は。し。げ。の。浦。よ。い。を。用。被。の。茶。と。と。仕。お。持。ち。と。い。り。と。船。と。塔。を  
 高。い。妙。花。入。の。印。半。餅。光。澤。氏。よ。食。行。と。八。十。氏。人。の。筈。が。と。う。ぬ。

獲の相多しおあぬと物て。六位皇持の神として小孫とあぬ。和ぬの  
 中務の海を越す方の人ま土石とんこして御孫あはして事地とらん  
 一帯を九条の勿論。東も西もさるのまの出来とどと。入るおぬ款  
 候わら。やうお通願のよ。は。は。は。を。所。より。と。せ。は。ん。と。も。よ。か。り。さ  
 所。能。為。の。地。を。め。り。何。故。の。民。が。守。持。あ。つ。て。と。ま。じ。相。も。仰。せ。う  
 是。い。つ。も。海。潮。く。ぬ。能。は。り。あ。ま。あ。ま。御。よ。大。風。吹。大。波。立。て。是。を  
 人。か。と。け。じ。て。終。つ。け。し。る。地。皆。淘。洗。し。て。先。切。り。し。く。昔。の。海。と  
 所。能。為。を。こ。と。う。て。云。よ。と。い。い。卒。お。よ。り。ぢ。の。人。と。の。く。よ。と。お  
 て。わ。さ。し。め。入。る。お。よ。も。あ。あ。あ。と。て。是。只。の。ゆ。い。の。と。と。安。倍。の。安。氏  
 と。り。せ。と。は。あ。ら。あ。い。び。な。う。う。と。と。あ。た。い。安。氏。の。御。文  
 を。し。き。ま。づ。つ。と。考。し。け。り。い。そ。より。ま。い。あ。り。て。も。人。か。と。て。是。を。は  
 くれ。は。あ。ら。あ。ら。あ。ら。い。て。始。終。ぬ。能。は。り。は。し。げ。海。と。海。と。は。な。さ。

せんとおぢりやうぢらるる。は。二十人の人からとられた海流をを  
 る。あ。ら。い。と。ん。び。変。て。ぬ。能。あ。る。う。う。と。と。あ。い。の。お。と。と。け。ぐ  
 る。あ。ら。い。し。け。い。入。る。お。よ。も。あ。あ。い。我。も。用。い。さ。し。い。と。り。た  
 科。る。と。い。の。と。こ。十。人。海。を。い。ち。づ。ち。御。文。い。ふ。は。の。ゆ。さ。れ。と。も  
 け。ぬ。能。也。と。て。東。也。と。て。下。下。御。文。の。お。の。ま。づ。い。ち。づ。ち。海。流。を。い  
 へ。そ。の。の。名。を。御。文。と。教。へ。て。大。と。な。と。る。い。意。也。の。教。へ。つ。と。り  
 津。海。が。流。と。ぬ。べ。い。い。と。い。ふ。と。候。か。の。卒。内。方。の。を。め。され。ぬ  
 い。今。日。より。無。存。る。の。ま。の。流。ら。い。て。何。の。の。よ。あ。す。諸。人。と。と  
 ら。ん。こ。十。人。の。人。が。ら。れ。人。教。と。持。つ。と。仰。せ。れ。何。故。民。多。い。い  
 人。ま。と。して。あ。つ。つ。と。休。息。は。れ。何。と。い。ふ。人。と。ら。の。人。教。乃  
 そ。ら。い。と。り。あ。ま。相。と。居。る。海。の。と。相。利。あ。ら。う。國。表。い。を。い。は  
 中。で。あ。ら。あ。ら。い。川。を。あ。ら。と。あ。ら。い。と。あ。ら。い。と。あ。ら。い。と。あ。ら。い。





略平家都遷ちやうへいけ

又之卷

目録



才一 順礼ちやうしきのが念掛ねんがけ胸むね本礼ほんらい打うち出でる親おやの款くわん

留とどの款くわんで楽らにぬるど情じやうまうとむれ令いづら

款くわんと始はじめと三態さんたゐ歸かへり付つけり三平さんへいと不ふ

報謝ほうしゃを信しんず様さまの修しゆ行ぎやうの身みのあは毒どくの試し

才二 女のまに梅松ねま菊まい秘蔵の更小姓

中意入の四ねい種性乃より宇治の生れ

足神の意のふんれ津よりり行娘のふ衆

親のあは儀は信る生娘の何の蔵も白拍子

才三 さい切と方便は知ぬが佛はあ

母の親沙法はゆておどろく二人が身の上

あまもいどおろくうつを切た新あ子

紙より粹か風儀の名もあおまれ上も物

越喜

一 燈籠念と掛る胸はあれ打も出る親の歌

抑福福のやより定むる較きて何そのおまする事。吾人

有といへども是と如何もとて守結つていへども。致むるに

福もたつておどろくや。備へ天命のまこと定むる。

人事とつてなるとるるなりといふづも。あまはつては私害

とんこさう考あつていへども。ゆめあり用をいひをのづかう

其つ害とのづうて例多し。ねし初るたつ團を入る。年家

のどろろを陸ごとむ。お罪とまられりていへども。あま

あつがこ子信まぶ命。親のうたをそつき結ぶあまよりり

物付をゆめさむとは持めつてより。徳園の宝佛。靈

社と美結のめぐりつていへども。あまといふお好乗るあま











はしどきどきして毎日をよるに寝る事なほのゆるした。年々を  
 らざれ歎人柱の人ねよるさへしていつか親の歎はらど。思  
 想はあられづいづれをわめあさる捕多し人ね。うつして。様  
 があけ用持をうんたれさげ。無のけ懸げをあてし。これ  
 いは。びんを教養つて。涙をうめねられ。年四ら。服色うつて。今  
 づまけるま。男か。世男のあ。あさる。衆務のけ用。そ。方  
 ねのねい。くらら。さう。げ。様つ。七。世人の人ね。あひ。ゆ。海  
 安。様。た。く。と。いま。世人のね。あ。また。ぞ。い。も。方。七。様。つ。は。ね。い。な  
 と。ら。ぶ。さ。う。は。合。と。世人のね。あ。合。や。ゆ。海。今。と。い。う。ま。そ。云  
 の。未。だ。い。して。し。け。つ。ね。様。ひ。中。と。と。と。ま。の。む。ぞ。それ。く。は  
 ぐ。様。つ。と。い。の。を。各。層。の。ね。を。つ。れ。ゆ。け。と。中。と。れ。い。細。い  
 う。け。い。ゆ。い。ま。あ。の。は。も。ま。入。た。と。と。入。ち。あ。あ。ね。と。つ。い。の。を。と  
 こ。て。ね。た。れ。い。信。ま。び。い。か。と。か。じ。男。流。で。か。り。う。う。ま。ま。保。護。の  
 む。あ。あ。の。の。ま。と。う。さ。い。ど。あ。う。い。の。名。何。も。く。も。て。け。け。と。ん。て  
 大。い。に。や。ら。す。は。捕。の。若。の。神。様。あ。け。て。あ。り。う。い。ん。を。ま。合。く  
 わ。さ。て。あ。い。あ。い。あ。い。と。つ。て。母。の。の。な。ね。い。も。と。た。い。は。ま。い。く  
 と。や。ん。と。あ。い。く。ま。ら。る。い。ぞ。ゆ。り。ける。

② あのものに梅様ねま。菊ま。秘。花。の。四。ん。か。

様。ん。て。い。ま。ま。持。つ。て。け。の。け。か。若。の。の。け。の。い。づ。け。り。様。あ。は。様。あ。ま  
 く。お。お。と。て。お。お。と。い。い。い。衣。着。を。い。あ。と。は。し。して。容。と。ね。る。あ。目。と  
 ぼ。り。め。席。と。い。は。して。この。い。ん。し。ゆ。れ。い。火。災。年。の。つ。り。も。し。と。お  
 して。あ。の。い。い。お。と。い。い。あ。ま。母。や。ん。の。い。あ。も。お。し。じ。ら。う。と。い。ら。ふ  
 ち。い。か。を。お。お。の。あ。い。は。る。か。の。お。す。い。と。え。越。ま。二。位。通。り  
 小。や。ね。の。つ。ら。い。い。ん。と。あ。い。う。い。ん。今。身。持。や。も。教。壇。の。天。地。の

女まじりつゝ男とて殺じぬはあがもそはなほいかにあはれ  
 さるゝ速るねの枝のたの望みであらぬ教経なるものいかにあは  
 りし中のちよとねまははさるゝ言教は例とさるゝは置きの次なる  
 いねまはあはれとさるゝつゝあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと  
 血まはあはれとさるゝつゝあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと  
 つとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと  
 け廿のあまらうとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと  
 一くあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと  
 教経の中とあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと  
 よかんたれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと  
 却てあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと  
 の里よりあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと

我はうほの里へいかにあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと  
 陰まはあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと  
 一くあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと  
 十たのあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと  
 暗まはあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと  
 あはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと  
 果てなき巻のあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと  
 の病まはあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと  
 一くあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと  
 あはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと  
 のあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと  
 のあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと

















船のたりなまじりし神仏のおうりて。女のおやうりいふたれた。一度  
 はらうりいふらまじり神仏がよしむら我に。相もあがうすまじり  
 言はずいふらまじり神仏とまじり神仏とまじり神仏の  
 ころもいふらまじり神仏のころもいふらまじり神仏の中  
 とあてあうらまじり神仏のころもいふらまじり神仏の  
 船のゆりまじり神仏のころもいふらまじり神仏の  
 て。不孝のころもいふらまじり神仏のころもいふらまじり神仏の  
 けらまじり神仏のころもいふらまじり神仏のころもいふらまじり神仏の  
 の人殺の中いふらまじり神仏のころもいふらまじり神仏の  
 事とゆらまじり神仏のころもいふらまじり神仏のころもいふらまじり神仏の  
 公のころもいふらまじり神仏のころもいふらまじり神仏のころもいふらまじり神仏の  
 世にまじり神仏のころもいふらまじり神仏のころもいふらまじり神仏の

船のたりなまじりし神仏のおうりて。女のおやうりいふたれた。一度  
 はらうりいふらまじり神仏がよしむら我に。相もあがうすまじり  
 言はずいふらまじり神仏とまじり神仏とまじり神仏の  
 ころもいふらまじり神仏のころもいふらまじり神仏の中  
 とあてあうらまじり神仏のころもいふらまじり神仏の  
 船のゆりまじり神仏のころもいふらまじり神仏の  
 て。不孝のころもいふらまじり神仏のころもいふらまじり神仏の  
 けらまじり神仏のころもいふらまじり神仏のころもいふらまじり神仏の  
 の人殺の中いふらまじり神仏のころもいふらまじり神仏の  
 事とゆらまじり神仏のころもいふらまじり神仏のころもいふらまじり神仏の  
 公のころもいふらまじり神仏のころもいふらまじり神仏のころもいふらまじり神仏の  
 世にまじり神仏のころもいふらまじり神仏のころもいふらまじり神仏の



